二〇二四年度入学試験問題

国　語

（五〇分）

第二回　二月二日実施

［注意］解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
問題用紙も提出しなさい。

吉祥女子中学校

一

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。字数指定のあるものは、句読点やかっこなどもすべて一字に数えます。

「久しぶりだね、青山君」

㋐相好を崩した湖山先生は相変わらず上機嫌だったが、少し痩せて衰えて見えた。

「先生もお元気そうで何よりです」

と答えると、おおとかああとか老人特有のあいまいな感嘆詞を呟いて、僕に座るように言った。僕はその声が好きだった。そのとき、相変わらずなこの和やかな空気を僕はどれほど求めていたかを思い知った。

「では久々に見せてもらおうかな。少し時間が空いたね」

と言いながら、僕に道具を勧めると湖山先生はゆったりとした動作で、顎髭を撫でた。いつもどおり墨をすり、道具を整え、筆に水を浸けて一気に＊春蘭を描こうとすると、まず①穂先が震えていることに気づいた。㋑気取られまいとすぐに筆から手を離したけれど、湖山先生の目をごまかすことはできなかったに違いない。先生はさっきよりも優しく微笑んでいた。

以前はただ単に描くだけでよかった。だが今はほかの誰でもなく、この人に認められたいという想いが強くある。僕が見てきたものを伝えたいと思っていた。

筆を持ちなおし、すぐに蘭を描いた。手順はいつもと同じだ。もう手は無意識に動いていた。葉を描き、花を描き、点を打ったとき、たった一枚しか描いていないのに全速力で走ったときのような疲労と走り終えた後の虚脱感を感じた。湖山先生は皺皺の細い目で絵を見て、それから僕を見なおし、また絵に視線を戻した。湖山先生は顎髭を撫で続けている。何を考えているのか、まったく分からない。そのまましばらく時間が過ぎた。そのしばらくの間、僕の心臓は描き終わったのに、さらに強く脈打っていた。湖山先生

注　＊春蘭……植物。ラン科の多年草。

の目をまともに見ることができない。
「青山君」
僕は、はい、と答えながら視線を上げた。湖山先生は笑っていた。
「言うことがないよ。すばらしい」
「ありがとうございます」
僕はそのまま机で頭を打ちつけてしまいそうなほど深くお辞儀した。
「よくこの短期間にこれほどまで蘭を極めたね。正直に私は驚いたよ」
「あ、ありがとうございます。恐縮です」
「よほど、必死に描いていたんだね。もともとの才能というのもあるのだろうけれど、これほど上達のはやい人は一人も知らないよ。あの斉藤君ですら、もう少し時間がかかったものだ。よくがんばったね」
僕は何も言えなくなって頭を下げた。感極まるというのは、まさしくこういうことなのだろう。喜びで呼吸が乱れた。自分の中に力が生まれてきたのが分かった。僕は大きく息を吸い込んだ。②僕もやっと笑っていた。
「いい顔になった。そして、いい絵師になったね」
僕は何も言えずに頭を下げ続けた。うんうんと湖山先生はうなずいた。
「美しい線を引くようになったね。本物の春蘭は見たかい？」
「ええ、見ました。描いているものとまるで違っていて戸惑ったけれど、でも実物を見てから少し気が楽になりました」
「楽に？」
「ええ、あのこんなことを言うと怒られそうなのですが、本当はどう描いてもいいんじゃないか、って思って」
「なるほど」

「それから、何気ない草や木を、水墨はどうしてこんなにも美しいものに変えることができるのだろうって思いました。それで本当はもっといろんなものが美しいのではないかって思いました。いつも何気なく見ているものが実はとても美しいもので、僕らの意識がただ単にそれを捉えられないだけじゃないかって思って……。③絵を描き始めてから僕はようやく何かを見ることができるようになったんだって思いました」

湖山先生は顎髭を撫でるのをやめて、じっと話を聞いてくれていた。話し終わると少しだけ目を細めた。そして、立ち上がり、僕と席を替わると、いつものようなさりげなくも素早い動きで絵を描き始めた。一つは竹、もう一つは梅だった。どちらも湖山先生が描くのを見るのは初めての技法だったが、これまで僕が見てきたものとは別物だった。湖山先生の筆はやはり魔法のようだと感じざるを得なかった。

絵の中の何処かにリアリティがあり美しいとか、実物の特徴を丁寧に捉えているとか、線が際立った表現をしているとかではない。むしろそれとは逆で、お手本の中の絵はどれも特に何も主張してはいない。手を抜いて、気楽に描いているのがよく分かる。サラサラと描いていて手数もやたらと少ない。だが、そうした特徴のなさに反比例して、美しいのだ。

これまで水墨のさまざまな表現を見てきて、それぞれの絵師の技法上の特徴と画面上の美の要素を探ることはできていた。いつだって、その絵の中で何を見れば良いのか、はっきりと分かっていた。だが、湖山先生の技法を改めて眺めると、目の前で描かれていても、どれだけ完成までの瞬間を見逃さずに見ていても、何が美しいのか、まるで分からない。何が美しいのか、まるで分からないのに、何かが圧倒的に美しいのだということだけを、理解できないまま感じてしまう。それは意識というよりも、本能的な感覚に近い。

僕は絵を眺めながら、何かが消えて溶けていってしまう感覚に襲われた。それは切なさでもあり、充足でもあった。ひたすらに何かが消えて去っていきながら、それでいて、何かが生まれ続けている感覚だ。大きな滝や、巨大な山の前に立ったときのような、侵しがたい気持ちにも近く、目を奪われながら離せないような震えだった。絵は二つともどこまでも素朴で単純なものだった。

絵が乾いていく瞬間、墨色の竹は青々と変化しそのまま緑に見え、梅の枝は風雪に耐える力強さをたたえて、花はただの線描であるはずなのに香りや際立つような白さを伝えた。

手順は簡単に飲み込める。千瑛や斉藤さんの描く姿を見ていたので、方法は頭に入っていた。それほど複雑な操作は何もない。④だが、ほかの誰が描いてもこうはならない。

絵を描き終えた湖山先生は筆を置いた。

「この二つの画題は、もう見たことがあったかな?」

僕があいまいにうなずくと、湖山先生は笑った。確かにどちらもしっかり見たことはなかった。

「では現物を見に行こう」

湖山先生は立ち上がり、僕もそれに続いた。相変わらず軽い足取りで、湖山先生は中庭に向かってスタスタと歩いていった。サンダルを履いて初めて歩いた中庭は予想以上に広かった。西濱さんが手入れをしているところを見たことはあるが、実際に降りて歩いたことは一度もない。⑤湖山先生はどうやらかなり機嫌がいいらしく、ときどき不意に立ち止まり、なんでもない景色を数秒眺めてはまた歩き出す、ということを繰り返していた。庭の垣根の近くにある鉢に入った竹の前に立つと、こちらを振り返り、

「こういうのはどうだろう?」

と、嬉しそうに訊ねた。人の背丈とあまり変わらない細身の竹にいくつもの笹が付いていた。これまではそこにあって漫然と通り過ぎていただけのただの笹竹も、湖山先生と並んで見るとやたらと立派な美術品のように見えた。僕は実物の竹を見ながら、水墨で描かれるお手本を透かしてその場所に見ていた。⑥たぶん湖山先生もそれを問いたかったのだろう。僕は、

「複雑ですね」

と答えた。湖山先生はうなずいた。

「そのとおりだ。実際の竹は、描かれた竹ではない。多くのものは目に入り、それを楽しませてくれるが、それを人の手がすべて描

くことはできない。あっちを見てごらん？ あちらはどうだろう」

湖山先生が指さした方向の先には、たくさんの葉を茂らせた大きな木があった。幹は曲がりくねりごつごつとしていて、うっすらと苔が生えている。間違いなく湖山先生が指さしているのは梅の樹だ。こちらもあまりにも多くの葉や枝があり、何処をどう切り取っても、まとまりが生まれない。

「あれも難しそうですね。とてもじゃないけれど僕は描けない」

「そうだね。きっと私も描けない」

僕は驚いて湖山先生を見たが、湖山先生は笑ってから、うなずいてゆっくりと歩き出した。僕はその後ろを並ぶことなく付いていった。

「墨と筆を用いて、その肥痩*、潤渇、濃淡、階調を使って森羅万象を描き出すのが水墨画だが、水墨画にはその用具の限界ゆえに描けないものもたくさんある。絵画であるにも拘わらず、着彩を徹底して排していることからも、そもそも我々の外側にある現象を描く絵画でないことはよく分かる。⑦我々の手は現象を追うには遅すぎるんだ」

「遅すぎる、ですか」

湖山先生と僕は縁側に腰かけた。天気がよく風も心地よい。穏やかな日に庭を前にして座るなんて、なんてことのないことだけれど、そんな、なんてことのない幸福を味わえる人なんてこの世界にどれだけいるのだろうか、と思ったりもした。けれども今日は、僕らの番だ。湖山先生の声は、そんな穏やかな日に似つかわしく、とても優しい。

「いまは家の中に蛍光灯もあり、光は停止しているけれど、こうして、庭に出て物の形を眺めていると気づかない間に、物の影や形は少しずつ変わっていっているのが分かる。現象を追い、描き始めて、物の形を追い、彩*を追い、すべてを仕上げても、終わっ

注　*肥痩、潤渇、濃淡、階調……線の太さや明るさなど、絵を描く際に工夫するさまざまな具合のこと。
　　*彩……配色。

たときには、またすべてが変わっている。光は止まることなく動き続けているんだよ。水墨画という絵画が確立する過程で、きっと昔の人たちはそのことに気が付いたんだと私は思うよ」

「光は止まらない……時間が動き続けるということですか」

「そういうことだ。動き続け、刻々と変わり、姿を変え、形を変え、また現れる。それが自然というものだ。それを描くにはどうしたらいいのか、昔の人たちは考えたんだ」

「どうすればいいんですか？」

湖山先生は笑った。それからとても懐かしいものを見るように、僕を見た。

「今日、私は竹を教え、梅を教えた。今の君ならこの二つを簡単にものにしてしまうだろう。類いまれな観察眼と情熱を持つ君なら、この二つのお手本を自分一人でも習得してしまえるはずだ。君はたった一枚の絵からほかの人が学び取ることよりも、はるかに多くを感じ、たいせつなことにあっという間に気づいていく。だからこそ、私は君に気づいてほしいと思うことがある」

湖山先生は立ち上がり、数歩先にある小さな菊に手を伸ばした。何気なく咲いていた菊だった。

⑧「青山君、これが君の先生だ」

湖山先生は僕に菊を手渡した。

「この菊に教えを請い、描いてみなさい。これは初心者の卒業画題であり、＊花卉画の根幹をなす技法がここに収められている。私には伝えられないものがここにある」

背丈の低い白い菊は蕾と大きな花弁を付けていた。葉は色濃く強い。手渡された瞬間から、僕はこれをどう描くのかを考えていた。

「いいかい、青山君。X絵は絵空事だよ」

僕は視線をあげて、湖山先生を見た。湖山先生の⑨目は笑ってはいなかった。

（砥上裕將『線は、僕を描く』）

注　＊花卉画……植物画。

問一 〰〰線㋐「相好を崩した」、㋑「気取られまい」の意味としてもっとも適当なものを次の**1**～**4**からそれぞれ選び、番号を答えなさい。

㋐「相好を崩した」

1 おだやかな表情の　**2** 普段とは異なる表情の

3 にこやかな表情の　**4** すこし疲れた表情の

㋑「気取られまい」

1 気付かれないようにしよう　**2** 気付かれたかもしれない

3 気が付いただろうか　**4** 気付くはずはないだろう

問二 ――線①「穂先が震えている」とありますが、このときの「僕」の様子として、もっとも適当なものを次の**1**～**4**から一つ選び、番号で答えなさい。

1 湖山先生の前では何もとりつくろうことはできず、自分の本当の実力が見透かされてしまうと恐れている。

2 特段の技術をもつ湖山先生の前で萎縮してしまい、いつも通りの力を出し切れるか気がかりになっている。

3 湖山先生の求めている段階まで自分の技術が到達しているか自信がなく、失望されるのではと怯えている。

4 これまでの練習の成果を発揮し、現時点の全力を湖山先生に見てほしいと思うことで力んでしまっている。

問三 ――線②「僕もやっと笑っていた」とありますが、それはなぜですか。もっとも適当なものを次の**1**～**4**から一つ選び、番号で答えなさい。

1 湖山先生から期待していた以上の評価をもらったことに驚き、喜びしか感じられなくなったから。

2 湖山先生の言葉に感動して自分の取り組みにも自信がつき、張りつめていた気持ちが緩んだから。

3 自分の力を出し切って最高の作品を描くことができ、画家としての将来に自信と希望が持てたから。

4 必死に取り組んだ作品をほめてもらい、これまでの苦労や責任からやっと解放されたと思ったから。

問四　――線③「絵を描き始めてから僕はようやく何かを見ることができるようになった」とありますが、どういうことですか。もっとも適当なものを次の**1**～**4**から一つ選び、番号で答えなさい。

1　ただ目に映るものを見るだけでなく、自分がどう表現したいかということを考えながらものを見るようになったということ。

2　ただ一つの姿としてものを捉えるのではなく、その時々に変化する様々な姿を持つものとして捉えるようになったということ。

3　いつもはただ過ぎ去るものとして眺めていたものを、絵という形に表現するために目に焼き付けるようになったということ。

4　これまでも目には映っていたが、描くために集中して見ることで初めて本質に気づくことができるようになったということ。

問五　――線④「だが、ほかの誰が描いてもこうはならない」とありますが、湖山先生の絵の説明としてもっとも適当なものを次の**1**～**4**から一つ選び、番号で答えなさい。

1　際立った特徴はないが、言葉では説明のできないような圧倒的な美しさがある。

2　丹念に描きこんで実物の特徴を非常によく捉えており、絵にリアリティがある。

3　一本一本の線にすべて意味があり、気楽に描いているようでとても緻密である。

4　何かを失うと同時に大切なものを得たような、切なさと複雑さを兼ね備えている。

問六　――線⑤「湖山先生はどうやらかなり機嫌がいいらしく」とありますが、ここまでの言動から考えて、湖山先生の機嫌がいい理由としてもっとも適当なものを次の**1**～**4**から一つ選び、番号で答えなさい。

1　「僕」と一緒（いっしょ）に歩く中庭が、西濱さんの手入れによって予想以上に美しく整えられていたから。

2　「僕」が水墨画について想像以上に深く考えていることを知り、うれしくなったから。

3　「僕」の返事があいまいだったために、まだ教えられることがあることに気づいたから。

4　「僕」が水墨画のお手本として使える素材が中庭にたくさんあることを、誇（ほこ）らしく思ったから。

問七　――線⑥「たぶん湖山先生もそれを問いたかったのだろう」とありますが、湖山先生が問いたかったのはどういうことですか。もっとも適当なものを次の**1**～**4**の中から一つ選び、番号で答えなさい。

1　この竹の手入れの様子や生育具合はどうかということ。

2　美術品としてこの竹に価値があるかどうかということ。

3　水墨画の手本としてこの竹をどのように見るかということ。

4　この竹を水墨画に描くとしたならどう描くかということ。

問八　――線⑦「我々の手は現象を追うには遅（おそ）すぎる」とはどういうことですか。「自然」という語を用いて五十字以上六十字以内で説明しなさい。

問九　――線⑧「青山君、これが君の先生だ」とありますが、どういう意味ですか。次の文の□にあてはまるように、三十字以上四十字以内で湖山先生の言葉の意味を説明しなさい。

水墨画は□という意味。

問十　――線⑨「目は笑ってはいなかった」とありますが、それまでの湖山先生の笑顔と対比して、この時の先生の気持ちを説明したものとしてもっとも適当なものを次の**1**～**4**から一つ選び、番号で答えなさい。

1　それまでは「僕」から懸命（けんめい）な姿勢を感じたために自然と笑顔になっていたが、語り合う中で水墨画の道の厳しさを「僕」に伝えなければならないと思うようになった。

2　それまでは先生として「僕」の成長を喜んでいたために自然と笑顔になっていたが、語り合う中で「僕」の未熟な部分を知って改めさせたいと感じるようになった。

3　それまでは「僕」との実力の差が分かったために自然と笑顔になっていたが、語り合う中で「僕」と距離（きょり）を置くことによって更（さら）に成長してほしいと思うようになった。

4　それまでは水墨画に対する「僕」の考え方を誇りに思ったために自然と笑顔になっていたが、語り合う中で「僕」を一人前に育てることを重責だと感じるようになった。

問十一　――線**X**「絵は絵空事だよ」とありますが、湖山先生は水墨画をどのようなものと考えているのですか。これまでの問いで考えたことをふまえて七十字以上八十字以内で説明しなさい。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。字数指定のあるものは、句読点やかっこなどもすべて一字に数えます。

＊口伝の一つに①「堂塔の建立には木を買わず山を買え」というものがあります。堂塔の堂とは、法隆寺などの伽藍のなかにある金堂や講堂などのお堂のことです。塔は五重塔や三重塔のことです。

「伽藍」は聞き慣れない言葉でしょうが、昔の寺社建築の門や塔、堂の廻廊などを含むすべてをいいます。伽藍の配置は仏教の解釈により、時代や寺ごとに異なっていました。

法隆寺でもそうですが、昔の寺は学校の役目を果たしていましたから、釈迦を祀る堂やお骨を安置した塔、授業を受ける講堂が伽藍の中心を占めます。このほかにも敷地内には修行僧たちが生活するたくさんの建物がありました。

「堂塔の建立には木を買わず山を買え」という口伝は、大きな建物をつくるときには、木を一本一本バラバラに買わずに山を丸ごと買いなさいという意味です。便利だから、安いからといってあちこちの山や林から買い集めてはいけませんという忠告です。

今、ふつうの民家を建てるとき、大工さんは製材された木を材木屋さんや製材所に注文して、柱や梁や天井用にと目的に合わせて買ってきます。製材所では運び込まれた木を、柱用や梁用に寸法を決めて用意します。

ア 昔は棟梁が自ら山に行って「この木は柱に」「この木は梁に」と使い道を決めて山で大雑把に製材して運んできていました。大きな建物をつくるには大変な量の木材がいりますが、そうした材料を買うときには山の木を丸ごと買うことを勧めているのです。

なぜ山ごと買うことがいいのか、その訳はつぎの口伝「木は生育のままに使え」に関係があります。

注　＊口伝……大事なことがらや秘密を口で伝えること。
＊梁……建物の重みを支え固定するために、柱の上部に水平にかけ渡す木材。
＊棟梁……大工たちをまとめる頭。

木は自然のなかで育ちます。植物は自分の意思で動くことはできません。世代を替えて、種を遠くに飛ばしたり、鳥に運んでもらって子供たちが別の場所に移ることはできますが、芽生え、根を張った木は自分の意思で場所を選ぶことはできません。ですから、木や草はあたえられた環境に適した生き方を選びます。適応できないものは死んでいくしかありません。

木の生えている山は南の日当たりのいい斜面もあれば、北の日当たりの悪い、寒い場所もあります。尾根筋の風の当たる場所もあれば、谷沿いの比較的風当たりの少ない場所もあります。尾根は山の高くなったところ、谷は凹んだ部分です。山はこの繰り返しでできています。環境が変われば土壌も変わります。土は岩が崩れてできたものです。そこに育った植物や昆虫などの遺骸も、バクテリアなどによって土にかえります。**イ** 土はその場所ごとに異なり、そこで育つ木々も少しずつ性質に違いが出ます。また、同じ山でも尾根筋は、風が当たり、雨が降れば腐葉土（落ち葉が積もって土にかえったもの）や土と一緒に栄養分が下に流れ出します。ですから、尾根筋よりも谷のほうが土壌は肥えています。尾根は乾いていますが、谷には沢が流れていたりするので湿気があります。林のなかでも、林の縁と、林のなかで木々に囲まれて生きているのとではずいぶん違います。縁では外側が日や風に当たります。なかは風に影響を受けにくいかわりに日当たりもよくありません。

木はこうしたあたえられた環境のなかで長い時間をかけて大きくなります。

木が生きていくうえで必要なのは地中から吸い上げる栄養分と水、それと太陽からの光です。同じ場所に育つ木でも、光を十分に受けられない木はやせ細り死んでいきます。ですから密林のようなところでは、木同士が必死で背を伸ばそうと競争しています。

太く大きな木は寿命の長い木です。大きな木はその時間の分だけ、②自分の育った環境の影響を大きく受けていることになります。それがその木の癖となって、材木になった後でも出てくるのです。

一方、厳しい環境で育った木は、それに耐え続けてきたという癖を持っています。見た目には何でもない、枝を張り、葉を茂らせた一本の木でも、**ウ** ずっと西風に吹かれて育ってきた木は風に立ち向かっていくために枝をしっかり張り、根元も風に負けないようにがっしりと張っています。そして風に押されたら押し返す力が蓄えられています。こういう木を伐り、材にしますと、木に

備わった風に対抗する力がねじれとなって出てくるのです。

また木はたくさんの日の光を受けるほうが栄養分を蓄積できて大きくなります。ですから、日当たりのいい南側には枝がたくさん出て葉を茂らせます。北側の枝には日が当たりませんので、枝の数も少ないのです。木の枝のあったところは柱や板にすると節となって残ります。ですから一本の木から柱をつくっても日当たりのいい南側には節が多く、北側には節が少なくなります。材木を扱う大工さんたちは、③日を受けて育ったほうを「日表」、日の当たらないほうを「日裏」と呼んで区別し、使い方に工夫を凝らします。木には育ったところによってそれぞれこうした癖があるので「木は生育のままに使え」という口伝が残されているのです。

大工さんは柱を見れば、「日表」と「日裏」をすぐに見わけます。こういう言葉が生まれ、使いわけられるほどに、同じ一本の木でも、日の当たる側と日の当たらない部分では性質が異なるのです。

昔、小さな舟は櫓という道具でこぎました。櫓は舟を推進させる道具ですから丈夫でなければなりません。多くはカシの木を使いました。櫓をつくる職人さんは一本の丸太を買うのですが、使うのは日表だけでした。その部分が丈夫で粘りがあったからです。

日が当たるところと当たらないところができるのは、家や寺などの建物についてもいえます。家も木と同じように一度建ったら動かすことはできません。

一軒の家がぽつんと建っていると想定しますと、東側には朝日が当たります。南側は日中に日が当たりますし、西側には夕方日が当たり、そして北側は日が当たることはありません。法隆寺の宮大工たちはこのことをよく知っていて、「木を生育のまま」に使ってきました。山の南斜面にある木は建物の南側に、北のものは北に。それも生えていたときと同じ方向に使ったのです。この口伝は「木は育ったままの方向で建物にすれば、建物は長くもちますよ」と教えているのです。

古い創建当時の法隆寺の柱を見ると、南側の柱には［A］が多くあります。

南側の木はさきに話しましたように、[B]がたくさん出てきますので[A]も多いのです。

山の南側の木は建物になっても南へ使えといいましたが、一本の大きな木の場合、二つや四つに割って柱にすることもあります。一本の木でも中心の部分と樹皮に近いところでは、含まれる水分の量などが違うために、そのまま乾燥させるとひび割れが生じます。そのため、大きな木が手に入るなら二つや四つに割って柱をつくります。

もし二つに割ったのであれば、日表と、日裏に割り、それぞれを南と北の柱に使います。四つに割れば、南は南、北は北、東は東、西は西にと、生育のままに使うのです。

木を生育のままに使うためには木を一本ずつ買うのではなく、最初に紹介した口伝の「木を買わず山を買え」を守らなければなりません。

「生育のままに使う」木のさらなる使い方を指示した口伝に「堂塔の木組みは木の癖組み」というものがあります。

木は工場から出てくる鉄骨やブロックのように均一のものではありません。南に面した木と北に面した木では性質が違いますし、風のあるところで育った木と林の真ん中で育った木でも性質は違います。木は一本一本木が育った環境も経歴も違います。人間が何人いても、まったく同じ人がいないように、木も一本一本性質が異なるのです。

その一本一本の木の性質を見ぬいて使えば、建物は丈夫で長持ちし、材となった木の寿命を使いきることができるというのです。

しかし、現代の物づくりでは効率が優先されます。こうした一本一本の性質の違いを区分けしていたのでは速くつくることができません。ですから、工場や製材所から出てくる寸法に仕立てられた木を「均一」な性質のものとして扱っているのが現状です。

しかし、実際には木は一本一本育った環境や受け継いだ遺伝子が違うのですから、異なった性質を持っています。

木のこの一本一本の異なる性質を大工たちは「癖」と呼んでいます。檜、杉、ケヤキ、栗、松などのように樹種ごとに木の癖は違いますが、同じ檜や同じ杉でも、生えている場所やそれらの種をつくった親木の違いで癖が違うのです。

人間でいうと、みんなが同じように生きていく会社や学校、社会では、④「癖」は悪いもののように考えられがちです。団体で生活していくためには、そのほうが便利で統制がとりやすいからです。たとえば戦争をするときに軍隊は同じ命令にいっせいに従わなくては、攻撃や守備に欠陥が出てしまいます。学校でも運動会のマスゲームを思い出してください。みんなが揃わなくては困ります。ですが、人間は工場から出てきた製品のように、みんな同じではありません。みんなが違う個性を持っています。社会生活を営むうえでは、まったく違う個性がそれぞれを主張して生きていくのはなかなか大変なことです。この癖ばかりを尊重していては効率が悪くなります。そういう考えがあるから「癖」を悪いものと考えるようになったのです。

実際、現代の大工さんの多くは製材所に注文するときに、木の癖や生育を気にせずに「何センチ角の柱」というふうに頼み、それを使います。こうした使い方では、⑤「木は癖で組め」という口伝を生かしようがありません。

木を癖で組むとはどういうことか例を一つあげましょう。

四本の柱で建つ建物を想像してください。

この柱に四本とも左ねじれの癖のある木を使ったら、建物は時間がたつにつれて木の癖が出て、たがいの力が同じ方向にはたらいて、建物そのものが左にねじれてしまうでしょう。屋根や壁はねじれを計算していませんから、ひびが入ったり隙間ができたりして建物の寿命を短くしてしまうでしょう。ところが、右ねじれと左ねじれをじょうずに組み合わせれば、木はたがいの癖を補い合いながら、なおしっかりと建物を維持していくでしょう。法隆寺はこうした癖を生かして、千三百年ももってきたのです。

こうした癖をじょうずに組み合わせることで、より丈夫な建物をつくりあげる。それがこの口伝「木を組むには癖で組め」の教えるところです。癖を悪いものとして排除するのではなく、長所と見てじょうずに生かして使えるようになることが必要だといっているのです。

木は伐り出してから寝かせておけば、癖が出てきます。癖を出させてから使えば、大工さんは難なくその木の癖を見取ることがで

きますから、使いやすくなります。ところが、技術の進歩はこうした⑥寝かせる時間というものを許さなくなりました。山の木は昔は伐ってから筏に組んだり、牛に運ばせたり、人間が引きずり出すなどして建築現場に届けられました。伐ってから現場に届くまで、ずいぶん時間のかかるものでした。

今は山の奥深くまで道を切り開き、大型車が入っていきます。ときには鉄線を張って吊して運んだり、ヘリコプターを使うこともあります。

山で伐って数日のうちに製材所に運び、寸法通りに加工して柱や板にすることも難しいことではありません。寝かす時間がとても少なくなっているのです。

今では、どんな木であれ、コンピュータを組み込んだ機械で一ミリの数十分の一もの正確さで加工できます。製材所も大工さんもそうした機械を便利なものとして使っています。こうした機械を使えば、長い修行をしなくても正確に木を刻むことができるからです。しかし、それは木がまったく癖がないものとして考えられているから使われている方法です。

でも木には必ず癖があります。癖がないものとして製材し、建物をつくってしまうと、木は建物になってから癖を出しはじめます。ケヤキという木は「暴れる」木です。癖を出させるために寝かせてから使っても、ねじれたり曲がったりすることがあります。ですから製材所でも注文通りの寸法の木を出すためには、それよりずっと大きく製材し、寝かせておきながら、暴れ具合を見て、出荷まで少しずつ補正しながら製材していかなければならないのだそうです。木にも素直な性格のもの、ちょっと暴れん坊なものがあるのです。使う側はその木の性格を見ぬいて、少しの時間で使えるもの、長い時間待たなければならないものと決めていくのです。

（中略）

それなのに、現在は効率を求めるあまり、自然の素材である木を工場生産の品物と同じように扱っています。これは木に対する考えばかりではないかもしれません。人間に対しても効率や利益を求めるあまり、癖や個性を無視してしまっているのではないでしょうか。技術が発達することは、それによって得られるものも多いのですが、失われるものもまた多いのです。

（塩野米松『木の教え』）

問一 **ア** ～ **ウ** にあてはまる言葉の組み合わせとしてもっとも適当なものを次の**1**～**4**から一つ選び、番号で答えなさい。

1 **ア** そして　**イ** しかし　**ウ** そうして

2 **ア** けれども　**イ** そのため　**ウ** だから

3 **ア** だから　**イ** つまり　**ウ** また

4 **ア** しかし　**イ** ですから　**ウ** たとえば

問二 ――線①「堂塔（どうとう）の建立（こんりゅう）には木を買わず山を買え」という口伝の意味としてもっとも適当なものを次の**1**～**4**から一つ選び、番号で答えなさい。

1 さまざまな場所の木を買い集めるのではなく、丸ごと買った一つの山の中から伐り出した木材を使うほうが、頑丈（がんじょう）な建物をつくることができるという意味。

2 神社など歴史的な建造物を建立するには、安価でふぞろいな木材を大量に使うよりも、高価でも丁寧（ていねい）に整えられた木材を使うほうが、建物が長持ちするという意味。

3 広大な土地を必要とする神社のお堂や塔を建立するときには、広い土地で伸び伸びと育った木を選んで買い集めるほうが、丈夫な建物になるという意味。

4 複数の場所で育った多くの種類の木材を買い集めるよりも、一つの山で育った限られた種類の木材を使ったほうが、丈夫な建物をつくることができるという意味。

問三　――線②「自分の育った環境の影響を大きく受けている」とありますが、育った環境と木が受ける影響についての例としてもっとも適当なものを次の**1**～**4**から一つ選び、番号で答えなさい。

1　他の木が集まっているところに生えた木は、少しの日光を効率よく吸収するために葉が多く茂る。

2　尾根筋にある木は土壌が肥えているため栄養分は豊富だが、風に耐えるためにねじれが強くなる。

3　湿度（しつど）の高い谷で育った木は水分を豊富に含むが、腐葉土が流れてしまうため大きくなりにくい。

4　林のなかの木よりも縁に生える木のほうが強く風を受ける一方、日光をより受けて大きく育つ。

問四　――線③「日を受けて育ったほうを「日表」、日の当たらないほうを「日裏」と呼んで区別し、使い方に工夫（くふう）を凝（こ）らします」とありますが、

(1)　「日表」の木材にはどのような長所がありますか。「…こと。」に続くように十字以内で書きなさい。

(2)　建物を建てるときにはこれらの木材をどのように工夫して用いるのですか。「…という工夫。」に続くように十五字以上二十字以内で書きなさい。

問五　**A**・**B**　にはそれぞれ一語の言葉が入ります。あてはまるもっとも適当な言葉を文中からぬき出して書きなさい。

問六　――線④「「癖」は悪いもののように考えられがちです」とありますが、なぜですか。もっとも適当なものを次の**1**～**4**から一つ選び、番号で答えなさい。

1　人と違う個性を持っていることで、全体の輪にうまくなじめず排除される可能性が生じてしまうため。

2　個性の強い相手を尊重するためには我慢（がまん）が必要となることがあり、全体の不満がたまってしまうため。

3　個人の性質を重視してしまうと全体のまとまりが損（そこ）なわれ、効率よく機能しなくなってしまうため。

4　良い性質も悪い性質も全て認めようとすることは、調和を乱し社会の崩壊（ほうかい）につながってしまうため。

問七　――線⑤「「木は癖で組め」という口伝」とありますが、この口伝はどのようなことを目的としたものですか。もっともわかりやすく説明している部分を――線⑤より後から四十字以上五十字以内でぬき出し、初めと終わりの三字を書きなさい。

問八　――線⑥「寝かせる時間」とありますが、この時間によってどのようなことができるのですか。三十字以上四十字以内で説明しなさい。

三

次の1～6の――線のカタカナを漢字で書きなさい。

1 港からギョセンが出ていく。
2 しばらく公園をサンサクすることにした。
3 トトウを組んで、強い力を発揮した。
4 ジュウオウ無尽（むじん）の活躍（かつやく）を見せる。
5 自らをリッすることができる人になりたい。
6 年末の大掃除（おおそうじ）に家族ソウがかりで取り組んだ。

問題は以上です

二〇二四年度　入学試験解答用紙〔国語〕（五〇分）

第二回二月二日実施
吉祥女子中学校

受験番号

氏　名

得　点

一

問一
㋐
㋑

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八

問九　水墨画は　という意味。

問十

二

問一

問二

問三

問四
（1）こと。
（2）という工夫。

問五
A
B

問六

問七
〜

問八

問十一

三

1　ギョセン
2　サンサク
3　トトウ
4　ジュウオウ
5　リッする
6　ソウがかり